



市民公開講座

前立腺がん

～QOL向上のために知っておきたいこと～

7月2日、TKPガーデンシティ仙台（仙台市青葉区）で、前立腺がんの最新の治療法を学ぶ市民公開講座「前立腺がん～QOL向上のために知っておきたいこと～」を開催。第1部では東北大学大学院医学系研究科講師・三塚浩二先生、弘前大学大学院医学研究科教授・大山力先生の基調講演を行い、第2部では参加者の皆さまから寄せられた前立腺がんの治療や発生原因についての質問に答えるパネルディスカッションが行われました。

■共催／河北新報社、ヤンセンファーマ株式会社

企画・制作／河北新報社営業局



東北医科薬科大学泌尿器科教授 佐藤 信 先生

皆さまご存じのように、前立腺がんの罹患率が非常に高まっており、1、2年ほど前から男性のがんの罹患率ではトップとなつていますが、前立腺がんの治療も数多く開発され、患者さまのライフスタイルに合わせた治療法の選択も広がり、自由度が高くなってきています。一方、私たちが皆さまと対面して治療に関するお話をする時間には制約もあり、現状の腫瘍マーカー等を説明して終わってしまうケースが多いのですが、本講演を通して、患者さまが医者側へ、生活の質を含めた要望を伝えやすく、医者側から知りたい医療情報をスムーズに得るためには、どういったポイントがあるのか、どんなことに気を付けるべきかを理解いただければ幸いです。



東北大学大学院医学系研究科泌尿器科学分野教授 荒井 陽一 先生

日本国民の半分はがんに罹患する時代です。男性は5割以上、女性は3割弱、合わせて半分は一生のうち、なんらかのがんにかかる時代になります。ひと昔前は不治の病という感覚がありましたが、医学の進歩で状況は変わっています。がんにかかってもきちんとした情報を得てがんを付き合っていく、あるいは必要になっていくことが必要になっていきます。私たち医療従事者も、皆さまの生活の質を保ちながらケアをしていくことに力を注いでいます。かかりつけのお医者さんと地域全体で支えていく体制を、国を挙げて私たちも取り組んでいます。健康上の不安などありましたら、遠慮なくご相談ください。本講座の内容が少しでもお役に立てましたら幸いです。

「増加する前立腺がん」と治療の現状

多様化し、進化する前立腺がん治療 患者さんの状態や希望に沿った選択が鍵に

前立腺は、膀胱を出たところに尿道を取り囲むようにあり、通常だとクルミくらいの大きさで精液の一部を産出していきます。歳を重ねると前立腺が肥大し尿が出にくくなるなどの症状が出るようになりますが、前立腺肥大と前立腺がんは基本的には別物です。前立腺がんは近年増加傾向にあり、2年前からは胃がんや肺がん、大腸がんなどのいわゆるメジャーながんを追い越し、男性では一番多いがんになっていきます。その背景には、食生活の欧米化や前立腺がん検診の普及などの影響が考えられています。



東北大学大学院医学系研究科泌尿器科学分野講師 三塚 浩二 先生

転移のない比較的早期の前立腺がんでは様々な治療法があります。一番多いのは前立腺を摘出する手術ですが、最近ではロボット支援手術が主流となつていきます。ロボットを使うことにより、繊細な操作が可能となり、手術のあとに尿漏れや勃起不全といった問題が軽減され、全体的な問題を軽くすることができると期待されています。放射線治療も大きな治療選択肢となります。放射線は体の外から照射されるので、手術に比べて体への負担が少なく、日常生活に支障がほとんどありません。ただし、転移のあるような進行した前立腺がんの場合は、ホルモン療法を行います。前立腺がんは男性ホルモンを餌にして増殖するため、男性ホルモンをブロックするとがんはいつたんに小さくなっていきます。ただし、ホルモン療法を行うと、骨の強度が低下し、骨折のリスクが高くなるため、骨を強くするための薬を併用する必要があります。

基調講演②

「患者さん目線に立った前立腺がん診療を目指して」

早期に発見し、正しく対応すれば治癒が可能 ライフスタイル、価値観、QOLを重視した治療が大切です

前立腺がんは、患者数は多いのですが、実際に前立腺がんでお亡くなりになる方はそれほど多くないという事実を覚えてください。要するに、早く見つけられれば治療できるということです。前立腺がんの症状は、早期前立腺がん（限局性前立腺がん）のうちは全く症状がありません。この時期にがんを見つけて正しく対応することが重要です。少し進行して尿道に病変が及ぶようになると、夜間頻尿や尿が滲れやすくなるなどの症状が出てきます。さらに病変が進むと、骨に転移すると骨が痛むようになります。そうすると腰が痛むとか、つまずいただけで骨折するなどの症状が出てきます。今は前立腺がんのほとんどが採血で診断する「PSA検査」で見つかります。その後、専門の先生が直腸診や超音波で検査して診断します。PSA検査で悪性度が、患者さんのお年寄りや合併症の有無、何より患者さんご自身の希望を重視して治療を提供していきたいと心掛けています。



弘前大学大学院医学研究科泌尿器科学講座教授 大山 力 先生

前立腺がんの診断は、PSA検査と直腸診、超音波検査で診断します。PSA検査で悪性度が、患者さんのお年寄りや合併症の有無、何より患者さんご自身の希望を重視して治療を提供していきたいと心掛けています。

パネルディスカッション



参加者の皆さまからいただいた質問に、荒井陽一先生がコーディネーターとなり、佐藤信先生、三塚浩二先生、大山力先生にお答えいただきました。

「前立腺がんの遺伝について」
前立腺がんは遺伝的要因が大きいのでしょうか？家族の男性が全員その治療を受けています（70歳女性）
三塚 前立腺がんになるには様々な要因が関連していることが分かっていますが、遺伝に前立腺がんになる方がいる場合は、その方が前立腺がんになる可能性も高くなるので注意が必要です。

「ホルモン療法の副作用について」
2年前に前立腺がんと診断されてホルモン療法の治療を受けています。ホルモン療法の副作用はないのでしょうか？膝が痛くなり、ゴルフのドライバーの飛距離が落ちた以外に自覚症状はありません（64歳男性）
大山 やはり筋力が落ちますので当然ドライバーの飛距離は落ちてきます。この方の病気の進行具合が前立腺だけにおさまっているのであれば、手術や放射線治療を受ける必要はありません。小線源で埋め込む針は前立腺の中では強い放射線を発しますが、体の外にはほとんど漏れ出すことはありません。

「前立腺肥大症は前立腺がんになるか？」
前立腺肥大症は前立腺がんになるのでしょうか？（76歳の男性）
佐藤 前立腺肥大症の人が必ずしも全員が前立腺がんになるわけではありません。確かに前立腺肥大症があったり、排尿機能障害があったりすると前立腺がんになりやすいというデータもありますし、あまり関係ないというデータもあります。

「腺ノート」をご存じですか？

「腺ノート」は、患者さんが日々の体調をパソコンやスマートフォン、記録用紙に記録し、グラフ化・見える化できるツールです。診察時に担当医に見てもらおうことで、短時間で患者さんの状態を伝えることができます。

詳しくは… 腺ノート